



□ 13
361
5



集義軒書卷七

脱福四

一 仙友向貴老を——改て——給て大簡か——人道の礼をすまふ

馬と同一やうなり者なり 云禮儀立人道養や——易簡なる

このありき易簡の節といふ今の禮儀をいふのは多事多端なり
多事多端を減すれば礼を修めり終る人も終る人々の礼

いふこと 向易簡か——大礼立る事いふ 云無禮無官の

すむむ——の——馬帽子か——さういふ刀の風俗をいふはけ

人道の礼儀の神といふ——あつては修飾の法を改て——

是——うふふふふふふ——礼をいふとて下着を裁きあひては

物を月下一今も礼衣をたぐふ小袖あり久きものなるは
のめり有るうり裏付多きの上多ありうり刀をとりてきれる
刀脇指大中小ありあり礼儀の時とは弊わりのりあり
ものもるものあり文定きるなり軍陣のちうり刀を折り
名付きよき刀とあり人より時より置とあり
國客軍客とありて治せ久く
くん 云々いふ地あり 質ある文とわと置時弊あり
向き質ありや 云々儀にきよの風俗質儀なりて後礼儀なり
くん 又時節の久くありけり方礼とせんわめ人ハき質なり基
— 吾時節とせん — 向ふん — 質儀の風俗とせんや

云々儀の質に泰伯の事ありて礼儀なりて是の夷と
夷の風俗なりありあり 夷とせん衣冠とせんや
日くきとありてけり時泰伯衣冠とせん 礼儀と
歳ありて夷を祀せん — 人の眼目と刺て物中あり人として
むのく俗とせん 後教に仁義とせん 力す徳とせん ありて
後代ありて中ありの礼衣とせん夷の布 — 風俗化 — 今も礼儀
とせん者せん仁義のありや — 是と人面獸とせん人の心
あり仁義ありとせん礼儀に仁義の質をかりる文に質とせん
久とせんは後とせん — 礼と後とありて復と

小川の——長河の——川流——我道と大海の——各々入て
群る河の地を以てしてある防ぎ退く口——わがの——

同是又中江流車のひの——世のさる流車とて陽陽陰
とそるる——四種仏性とあり——あやうく人の尸も現と
なり——云中に佛一説にん——ある流車と婦人のたが
あり——又そのたきく仏法の——と志あり他の云極をいへ
——けはき——信を——即ちの意をいふと流の
あるは——其ははるる——世人の——あるは子の日月の
輪の——なるは水とてぬめ——則中江此志に予もか
の——予う仏流と退——く次とや破とく用はあはれとく世
は有る流とありん有に——と退て我を——いへ——許容——破も其
乃破也とむはる——同程来の退る旅——ハ此が——云う也

是等の時新位ある今の日布の時と吾人の位と退——くは
向今仏法の法——くは僧と化法とそあるは——云うは破とく破は
うはは法とそある——程も破とそあるは——云うは破とく破は
そ中——入る——との——云其時の——今もは名別——素漢
後聖人教の人偏日用のるをさるはとそあるは——云うは破とく破は
其凡俗の云極——云其の理とて度とて所はるの理とは是
そあるは——云うは破とく破は——云うは破とく破は
乃佛の神妙と書き——云うは破とく破は——云うは破とく破は

ふれく故に有徳の思有道の臣は代の日と舒中して長し其民志の
ふれく故に力給あきけなり道なき世の目といやうと一を能く王民
くも一を能く力給あきけなり道なき世の目といやうと一を能く王民
ゆ—上言くわんあるは能く—いひて礼教富足よりせ—盗賊は貪窮
より起るもの富足と寛暇よりせ—貧病貪なり起りて友は
吾人をも及ぶのゆへ—國の基ろと強かば—浮侈篇云王者以四
海為家兆人為子一夫不耕天下受其飢一婦不織天下受其寒とて
後世の業々困苦多し—利ありきより故に中とする事よく利源
午の者んちとて中を知らざるすめ浮金なるものあり—故に五穀を玉
帛下の財倉次者むらう三つを高貴牛馬道路に入りてめめけるは高貴日く富く
武士貴くよ食乏がらん武士食乏たるは百姓たり—困窮せん百姓くすは
游民なり—あるは—人々次者は多きをくても公人をくすなまぬともある
古人の云貪は富弱生疆恥生祀危生安と云ん人々を福を次ぎやうとて
富くも奢くも盛たるれば貪—勢法や—人々強者を必弱く由政成
れて徳なきものは必乱る安んずるも微と不信るも必危—とこ
君の過は衆の罪よしとて—是より教—事行きて整ふるは徳の
くもくするは功なり世々の惡も其知を刻て微の術止—とて—
玉三人多く欲するんよ—加ふは困窮せるは時也刑罰を嚴くすと
ふれ甲斐なく—却る彼り勝てやすきものと其やぬき甚—と切な
う—易の云童蒙之吝吝者—小人也人の欲を初止むる時ハ易—とし

[illegible]

大抵と封を有道の賢臣ありて清濁の山川を治るゝとあるに天下存亡の源
を問ふ——世の長久をね——民を安んずるは男を冠——石を三石——
とあるに仁政をあらわすまゐりて水田澤にあつたり初春と純陽の月
なまけ日なり——麦化より四月と苗代めの時をくると是れ天気の不
平地気くるを氣化の爲に六月天地の氣を変氣化の毎ゆるやれ
と次は二月ハ夕立と云田畠を荒い草をとめむ夕立の時より神氣浪
あま山沢氣を通——雷風お助ふ事神皇の御教に攝政伯州の海
邊よりける相那の土兒水の夕立と神氣を披露と陰陽書より起る夕
立と云此の伯州と小豆湯よりぬきし神皇延年十一年陰陽小
豆湯より夕立なるものありきは毎度見らうとあるに因縁して富永
の昔告ぬけ時のえ民衆のつとむ十年の移りて幾千万といふ事なり——
二流きりあり——て神氣千本もたけ雷風毒を起さくちうなり——
むう——もうけ理を知て二流あり——とて仙術秘傳の十の又穀の生
幾万倍ともある——其の上民を安んずる——また高麗と陰風の
得て心氣涼——と病氣も下——こころとらす——とすうとあるや
二流のあきとるはゆえに穀の減か霧——ゆ——て日本の中ニめけ所多かれ
その減かあるをわたり——とゆ——とて英霊の思慕よくあることとも
け理と告ぐ者なりこれに知あるべき也——向山のありたるもの何ぞ
曰——ゆきとる常功道にたとへて七月の日なりとも夕立——ゆきとる何
そや——玄湖の神氣流とあるに別々夕立と二流の常功道を——

云湖の神武天皇御代に於て
天武天皇御代に於て

物に到るの情とあるをさういふ時と云ふ事ありて然るもの有り
況や出家の改行はねめてとや故に若く大衆も同じく改行ひしかる情の
うへもさういふ情の有りき故に人々下向を勉むる故に賢人の野
うきで物に到る情の有りき故に人々の下向を勉むる故に賢人の野
帰の如く如く玉の如くも帰るも人々の如く改行はねめて人々
よきと云ふ時と云ふ事ありて然るもの有りき故に人々下向を勉むる故に賢人の野
あれ人々情の時と云ふ事ありて然るもの有りき故に人々の下向を勉むる故に賢人の野
かれさういふ事人々改行はねめて人々の下向を勉むる故に賢人の野
ふ人々の改行はねめて人々の下向を勉むる故に賢人の野
時の積威と云ふ事ありて然るもの有りき故に人々の下向を勉むる故に賢人の野
他も

知物ともいふ理の如くさういふ事ありて然るもの有りき故に人々の下向を勉むる故に賢人の野
聖賢の如く其人を仰ぐて下向は知物ともいふ理の如くさういふ事ありて然るもの有りき故に人々の下向を勉むる故に賢人の野
玉の如く改行はねめて人々の下向を勉むる故に賢人の野
聖賢の一人の如く改行はねめて人々の下向を勉むる故に賢人の野
是居の功なりといふ事ありて然るもの有りき故に人々の下向を勉むる故に賢人の野
をめり聖賢の如く改行はねめて人々の下向を勉むる故に賢人の野
万歳と云ふ事ありて然るもの有りき故に人々の下向を勉むる故に賢人の野
の大名ありて然るもの有りき故に人々の下向を勉むる故に賢人の野
吉 程子云又一人は身勝平天下も廣若く自任豈能周於万
事故自任其知者適足為不知唯能取天下之若知天下之聰則

无所不周是自信其知則其知大矣予一々知事の功者多し
きく百姓の老人ふたつこの其知事一々知事の功者多し
向ふは其知事一々知事一々知事一々知事一々知事一々知事
何れや 云見よ其知事一々知事一々知事一々知事一々知事
先居ても其知事一々知事一々知事一々知事一々知事一々知事
これ其知事一々知事一々知事一々知事一々知事一々知事
才能あけて其知事一々知事一々知事一々知事一々知事一々知事

一 公友向家中作法一々知事一々知事一々知事一々知事一々知事
ゆり法度一々知事一々知事一々知事一々知事一々知事一々知事
心悦一々知事一々知事一々知事一々知事一々知事一々知事

悪人と雷声一々知事一々知事一々知事一々知事一々知事一々知事
小人一々知事一々知事一々知事一々知事一々知事一々知事
かく一々知事一々知事一々知事一々知事一々知事一々知事
人々一々知事一々知事一々知事一々知事一々知事一々知事
幸一々知事一々知事一々知事一々知事一々知事一々知事
のたき一々知事一々知事一々知事一々知事一々知事一々知事
くぬり一々知事一々知事一々知事一々知事一々知事一々知事
もそそり一々知事一々知事一々知事一々知事一々知事一々知事
あはる一々知事一々知事一々知事一々知事一々知事一々知事
物一々知事一々知事一々知事一々知事一々知事一々知事

[illegible]

[illegible]

弘法の法生のすく先ふふりてそきよりゆさる法を仰てそむくたうれ
海世のゆめら吉利と丹のころふし申書と割禁を希れともすむと
あつとて聖賢のあつとまふひく又書きとて民の困窮も法とされ
べし 同志は目をとも儒道と法とをたは吉利と丹と祈むん
云むと理とそゆとも今の儒道もは儒家か—— 名もふんとまていひ
うらのねしつきの儒道もけあの水エリ—— あむくく今の財よ
かたむのき——

集義外書卷八終

あむくく
あむくく
あむくく

